

乙 貞

第24号 通巻第5号第4号

1985年12月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

TEL 0775-85-4397

〒524-02

守山市服部町2250番地

昭和60年もまたたく間に11ヶ月もすぎました。今年をふりかえってみますと、春までは季節も順調で発掘作業も快調に進みましたが、一転梅雨になると、連日の雨で調査地はカエルや魚の泳ぐ池となっていました。そして夏は反対に猛暑で、雨のふらない日が多かったように思います。発掘はこうした天候に左右されながらも、成果のある調査としてがんばっています。さて今回の乙貞は、前号10月以降にたくさんの調査を行いましたので、これをお伝えいたします。

発掘調査だより

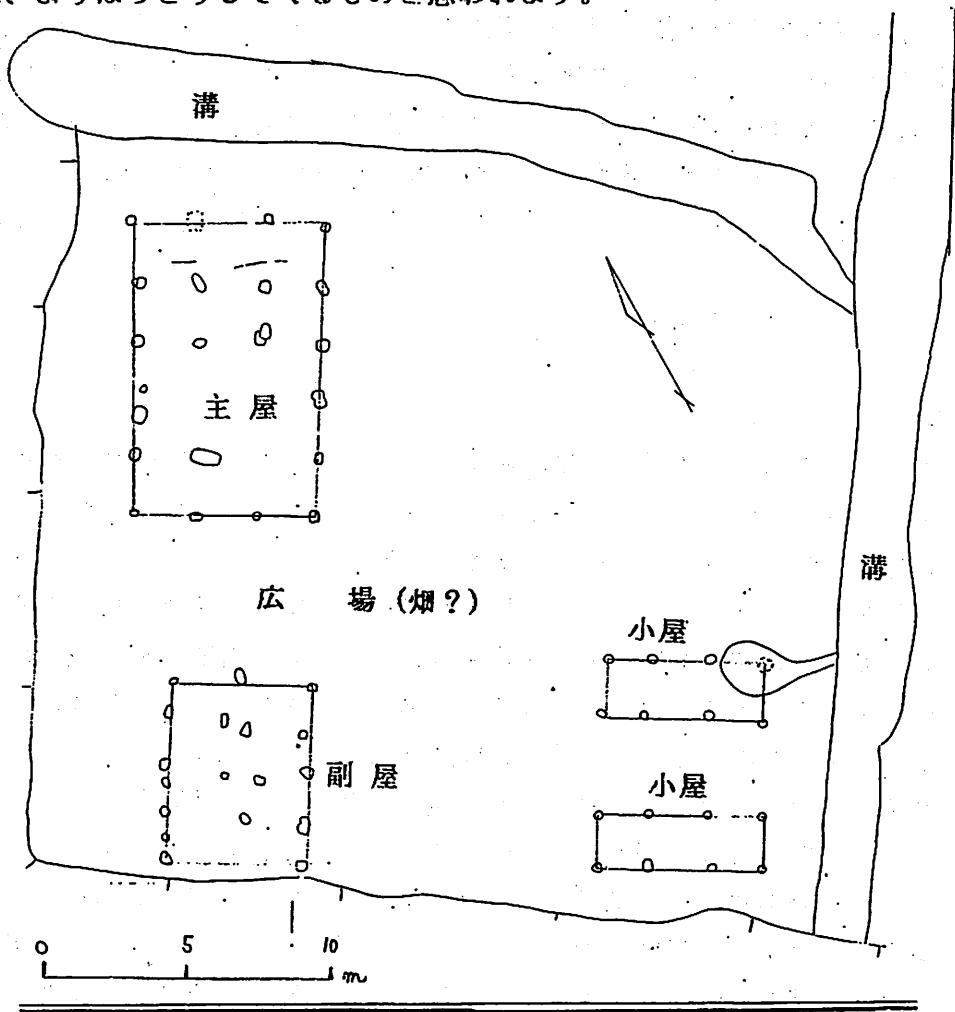
横江遺跡

昭和58年から調査を開始した横江遺跡もいよいよ3年目にはいり、集落の様子も次第に明らかになってきています。今回は、最近調査を終了した第12調査区の概要について報告したいと思います。(図-1)

第12調査区からは、古墳時代中・後期と平安時代後期～鎌倉時代の遺構を検出しています。まず古墳時代の遺構は中期の土塚5基と後期の掘立柱式建物3棟、溝3条があります。溝からは多くの土師器、須恵器とともに銅製の耳環(イヤリング)が出土しました。これは豪族など一部の人が身につけたもので、普通は古墳などから見つかります。横江遺跡のような集落跡から出土する例は少なく、近くに古墳が存在しているのかもしれませんが、次に平安時代～鎌倉時代にける遺構は、17棟以上の掘立柱建物と土塚墓1基、それと溝、土塚等を検出しています。建物は少なくとも4～6群に分けることができます。つまり当時この調査区内には4～5軒の「家」があったことがわかります。土塚墓は建物に近接して見つかり、屋敷墓と考えられます。これは長さ1.2m×0.9mの小さなもので、形はほぼ長方形をしています。ど塚墓内北側からは、中国から輸入された白磁碗2個と土師小皿1枚が出土しており、死者に北枕をとらせていたことが推定できます。2個の白磁碗はさかさまに、土師小皿

はお供え物でも盛っていたのでしょうか、そのままの状態です。この墓には、建物に近接してつくられていることや当時としては非常に高価な白磁碗を供献していることなどから、葬った人々の被葬者（死者）に対する強い愛着、愛情を読みとることができます。そしてその被葬者は、墓の大きさから子供であることが考えられ、もしそれがあたっているならば、この墓に感じられる強い愛着、愛情というものは、幼くして子供をなくした父母のそれなのかもしれません。

さて、第12調査区のすぐ隣では、14C頃の溝で区画された集落が検出されており、今回検出した平安時代後期～鎌倉時代の集落はこれの前身となったものかもしれません。いずれにしても今後調査が進めば、これら集落の推移、関連等は、よりはっきりしてくるものと思われまます。



横江遺跡 第1.2調査区 屋敷の一例

吉身南遺跡

市の土木課が国鉄守山駅構内で東口と西口との連絡地下道を建設する工事に伴って発掘調査を実施しました。10月後半に東口を終え、11月の後半には西口を調査しました。東口部分では竪穴住居2棟（古墳時代後期）、ピット、土がみられました。

良好に残っていた1棟は住居の約1/4が建設工事部分にかかり、床面までの深さは約20cmです。土師器の高、カメに混ざって須恵器のカメと器台の破片が出土しています。住居内で須恵器の器台が出土することは珍しく、またその時期も5世紀の終わり頃と思われ、守山市の中では古い須恵器であることがわかりました。

このあたりは吉身南遺跡の中心地で、これまでに「つがやま荘」「グランドメゾン」他で調査をしており、合計50棟近い竪穴住居を検出しており、更に密集した集落であることがわかりました。

吉身西遺跡

守山町字南高田一帯を対象とする土地区画整理事業に伴って、去る10月中旬より発掘調査を実施しています。1ヶ月余りを過ぎて快調に進み、約1/3強の部分を終えています。現地は県立成人病センター東側の水田地で、従来から吉身西遺跡の範囲内であることが知られており、今回の調査は区画整理事業の道路及び水路を中心に調査を進めており、幅6mで延長約1200m²を対象としています。（図-2）

これまでに判明した遺構では、古墳時代前期の竪穴住居7棟（およそ4世紀代）と掘立柱建物（高

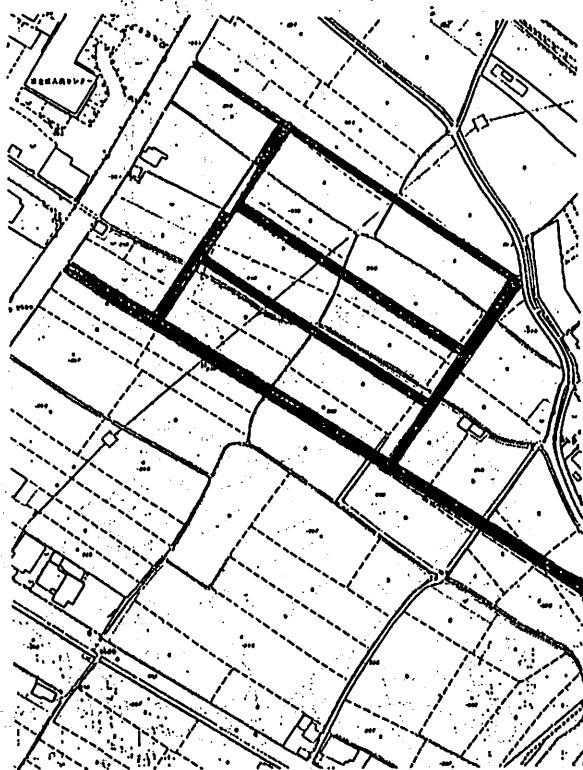


図-2 吉身西遺跡調査区域

床式倉庫2、建物1)、古墳時代後期の溝5条、平安時代中頃の溝7条などがあり、中でも飛鳥時代の井戸は良好に遺存していました。

以下では、これら多数の遺構のうち、幾つかを図面で紹介しておきます。先ず井戸ですが、直径約4mの円形の大きな穴を掘り(深さは2.5m)、中央よりやや北側に大木をくり抜いた杵を固定します。この杵は3枚の木から成っており、楕円形状に組まれています。そして順次木杵のまわりに土を埋め、木杵がこわれないように締め固めています。この井戸杵の中には、当時の土器が多量に入っており、ほぼ完形品になるものが15ヶ以上あるものと思われ、須恵器、土師器がありました。須恵器では身、提瓶、平瓶、壺、土師器は小型のカメだけでした。これは井戸の水が枯れて使用できなくなり、放棄する前にまつりをしたものと思われ、底辺りに須恵器を中心に「ぎっしり」つまっており、中段には土師器のカメ、上段にも土師器のカメが単体で出土しています。

(図-3)

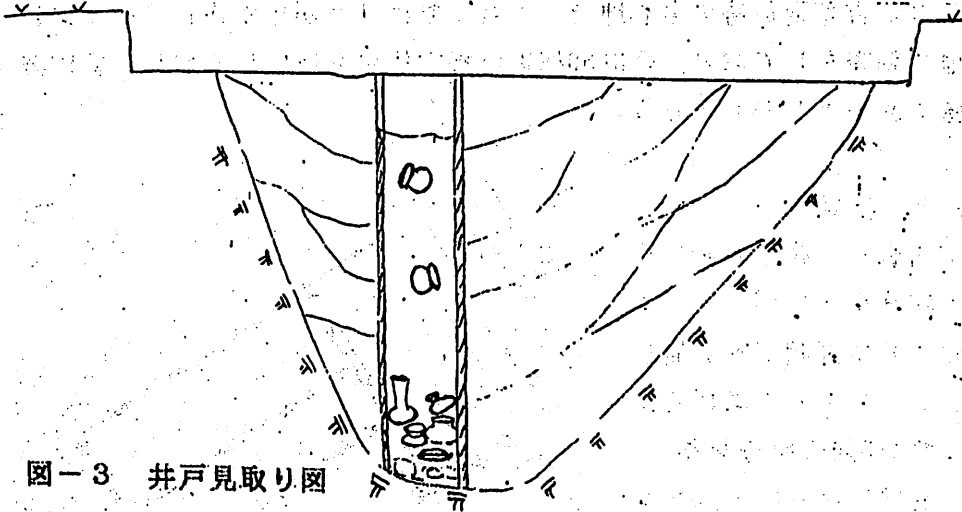


図-3 井戸見取り図

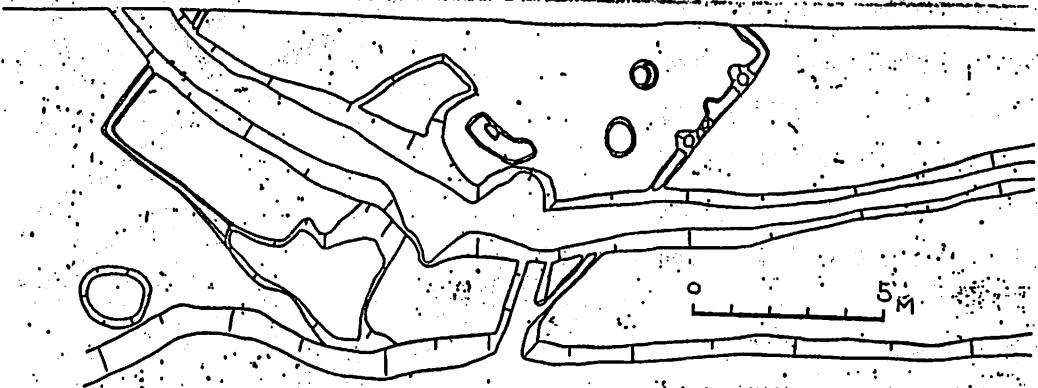


図-4 竪穴住居

次に古墳時代前期の竪穴住居跡ですが、以前から削平を受けており、検出した時の高さから住居の床までは良くて2 cm程度、悪い場合は住居の周壁溝だけがみえるという状態で、大きさが知れる程度でした。約5 mの方形住居と、7 mの住居の2棟だけが良好な住居です。(図-4)

調査は、現在継続中です。次々と発見される新資料については、次号以下で紹介したいと思います。関心のある方は一度現場へお越し下さい。

下之郷遺跡

個人住宅建設に先立つ調査として、11月中旬に下之郷町字三ノに所在する水田地、約330㎡を発掘調査しました。当地の北西辺に接する里道は、昭和57年に下水管理設工事に先立ち調査され、弥生時代後期の井戸跡を検出しており、現調査地には、井戸に関連する集落遺構の存在が想定されていきました。しかし調査地からは、土師器、須恵器を含む自然流路2条が北半より検出され、南半からは、砂レキが地山として表われ、調査前の想定をくつがえする結果となりました。今回の調査からは、守山の沖積地を形成した野洲川の支流が、古墳時代、当地に流れていたと考えられ、昭和57年に検出された弥生時代後期の井戸に関わる集落の存在を、この支流による消滅もしくは調査地方面以外に所在するものと捉えられます。

また、下之郷町字平川端においても、車庫建設に伴う調査を行いました。約80㎡の敷地に3 m×1.5 mのトレンチを設け、2条の溝とピット7ヶ所を検出しましたが、遺物は出土していません。この周辺は最近調査例が多く、幅狭の深い土塚がよくみつかるのですが、今回は検出できませんでした。

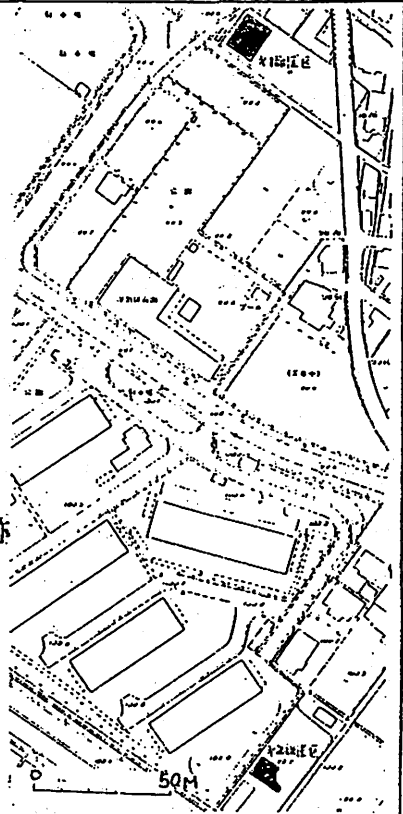
吉身南遺跡 (図-5)

吉身南遺跡では個人住宅に伴って2ヶ所の調査を行いました。まず第一調査区では設定したトレンチの北側半分が攪乱であったため、残り半分について調査を行いました。まず遺構ですが、トレンチ全体が大きな落ち込み状になっており、深さも道路面から一番深いところで3 m近くもあります。そのため特筆すべき遺構はありません。次に遺物ですが、暗灰色の粘土層および粘砂層から土器と木器が多く出土しています。土器は奈良時代の蓋や坏類の遺物がほとんどで、一部上層から緑釉陶器も出土しています。木器については最下層付近で多く、自然木が中心ですが、面取りをした木器や、はしご状木製品、槽、斎串(葎いの祭具)などの木製品も出土しました。付近では数年前に県教委が調査を行ったときも同様の遺構を検出したということですが、性格についてはよく

わかっていません。

第二調査区は農業用倉庫新設の事前調査で5 m × 10 m 前後のトレンチを設定しました。耕土直下で7ヶ所のピットを検出しましたが、建物が立つようなピットではなく、また、遺物も土師器片が数点出土しただけです。調査区の位置は吉身南遺跡の南端にあって、さらにすぐ南には浮気南遺跡が隣接し、ここでは弥生～古墳時代の竪穴住居もみつまっていることなどから、この周辺の調査が進んでくると、両遺跡のつながりや性格等も明らかになってくるでしょう。

図-5 吉身南遺跡
第一・第二調査位置図



益須寺遺跡 (図-6)

吉身町字島田において、店舗建築に先立って約10日間の発掘調査を実施しました。すぐ隣接地では7月にも調査を行っており、周辺地域においても過去に数回の調査を行っています。

今回検出した遺構は、溝、掘立柱建物、ピットで、このうち掘立柱建物は2間×2間の総柱建物の倉庫と思われます。先の調査でも掘立柱建物を2棟検出していますが今回は方位が異なり、建物のグループとしては別々であったと考えられます。

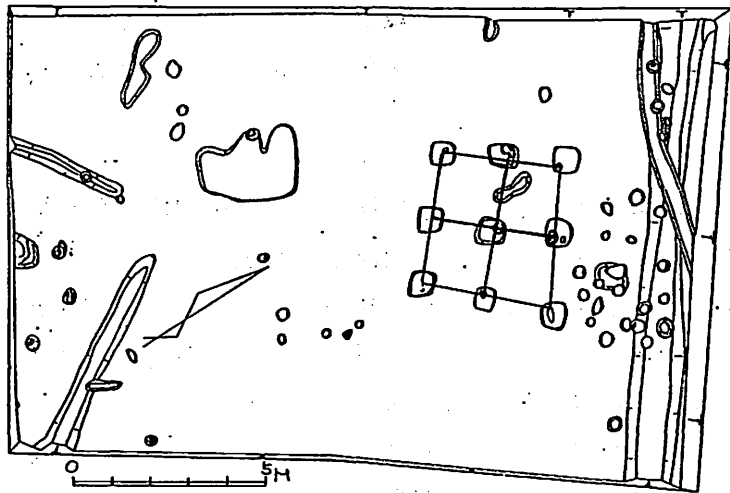


図-6 益須寺遺跡遺構図

後記

11月3日より開催しておりました特別展は、多数の来館者がありました。本年度は来年3月に昭和60年度の調査速報展を予定しております。

M. H